



土木の心は『守る』こと

東京土木施工管理技士会 会長
飛島建設株式会社
特別顧問

伊藤 寛治

令和2年、2020年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。

会員の皆様には平素より技士会運営にひとかたならぬご理解とご協力を賜り、誠に有り難く厚く御礼申し上げます。

今、思い起こせば2018年の「今年の漢字」は「災」でした。その言葉が選ばれた時、来るべき新元号元年は「災」を断ち切ろうという思いが込められていたでしょう。しかし昨年を振り返りますと、台風をはじめ大規模災害が頻発し、またもや多くの人々の生命、財産が奪われたことは痛ましい限りであり残念でなりません。しかし人々が「災」に無策であったわけではなく、自然防災に対して全公共発注者、全国民は努力を積み重ねてきました。首都圏域の水害対策事業を例にとっても、ダム、地下放水路・調整池、スーパー堤防などハード面での整備を積み上げてきたからこそ、先の台風水害では一定のストック効果を示せた事は間違いありません。そしてもう一つ忘れてはならない事は、首都直下型地震の起きる確率は以降30年で70%という説が唱えられて早10年近く経ったという事実です。今後直近にも発生する確率は増すばかりです。この様に防災インフラ・交通インフラの整備は立ち止まることは許されず、更に危機感をもってスピーディーに進めるべきでしょう。

但し今後のスピードに私は懸念を持っています。住民の中で「公」の意識がますます衰退し、

自己利益優先の主張が席卷することで、今後一層社会インフラ整備の遅滞を招くのではないかとことです。社会インフラ整備は多くの人を巻き込みつつ、その理解と協力をもって迅速に進めていくことが、自然災害の頻発や、予測される大震災、経済成長の低迷などの状況から見ても不可欠なのです。しかし「個」優先の主張が強くなった現在の日本では、理由はどうであれ少数意見でも抹殺することは許されず、いきおい関係者の意見はまとまり難くなり、その結果無為な時間を費やされたり、工事費が高騰する傾向が更に強くなっていくのではないのでしょうか。

災害に強い社会インフラ整備と首都東京の安全確保に我々はその役割を期待されており、技術者としての良識と誇りをもって安全と品質の確保を約束し、「協力・感動・貢献」の3Kを体現して進もうではありませんか。

土木の心は『守る』ことです。災害の危険から、人々の健康的・文化的生活を、そして経済活動を、守りたい！ 日本を良くしたい！

いよいよオリンピック・パラリンピックの開会式まで半年です。皆様がこれからも素晴らしい仕事をされることを願ってやみません。

最後になりますが、今年も会員の皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げ新年のご挨拶とさせていただきます。



「自然とのたたかい・調和」を より強く意識して

東京土木施工管理技士会 副会長
戸田建設株式会社
常務執行役員土木工事統轄部長

山田 裕之

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

東京五輪・パラリンピックを控え、各施設の建設・準備が急ピッチで進められています。都内の建設現場では「オリンピックまで休日なし」で稼働している工事もあります。建設業界の忙しさは、依然続いています。

昨年は、台風19号をはじめとする自然災害が多く発生しました。多くの被害がでて、安全で安心な社会基盤の大切さを改めて痛感しました。本格的な復旧作業はこれからというところが実態です。ダムや堤防のかさ上げをはじめとする河川整備の必要性、都市部の雨水・下水の整備や調整池のあり方など、我々が取り組む課題はたくさんあります。また避難勧告や避難指示、緊急放流、計画運休など、多くの人々が台風や豪雨の予報に対して考え、その行動を決定しなければなりません。

一方で働き方改革や建設キャリアアップシステムなど、優秀な担い手を確保・育成するしくみも、どんどんと加速しています。

当技士会も、若手技術者の育成や土木技術を広く普及するため、講習会・現場見学会・広報活動等を積極的に展開しているところです。特に多くの若手技術者に対して、土木の魅力ややりがいを発信していきたいと考えます。

我々の仕事はいつの時代も「自然とのたたかい」です。そして「自然との調和」が求められます。

そこに土木技術者としての使命、やりがいを求めます。

かつては、人の手に頼ることが多く、ダムやトンネル工事では多くの犠牲者がでていました。時代とともに機械・設備が進化していき、今後は、AIやICTを多用しながら、ロボット化・自動化・省力化を試み、安全・品質の確保や生産性の向上を目指す時代に移行しています。

ただ自然の力を甘くみたり、無理や無茶をすると災害やトラブルにつながります。よく現場の地形・地質、周辺環境、地下水位等に留意しながら細心の注意をはらい周到な施工計画で進めなければなりません。そこにICTやAIを駆使し、活用した施工技術や施工管理をマッチングさせる必要があります。

担い手不足の新たな時代に、「よりよい自然とのたたかい、よりよい自然との調和」を目指して進みましょう。多くの人々が本当に安全に安心して暮らせるインフラを整備するために、多くの土木技術者が、その使命を担い、それぞれの立場で全力を尽くすしかありません。令和の新たな時代に、一人ひとりが希望を抱き、夢を持ち、国土の強靭化に向けてまい進しましょう。

最後に、会員皆様のご発展とご健勝を心から祈念して、新年のご挨拶と致します。



建設業としての矜持

東京土木施工管理技士会 副会長
清水建設株式会社
執行役員土木東京支店長

桑原 泰秀

2020年の新春を迎え謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年はラグビーの日本代表が南アフリカに敗れたものの初の8強進出を果たし日本中が熱狂したW杯の開催や天皇陛下が即位を内外に示される「即位礼正殿の儀」など国民が祝意を示すおめでたい行事があった一年でした。またその一方で9月に千葉県を中心に強風によりインフラ施設に甚大な被害をもたらした台風15号に続き、10月には長野県から東北地方に至る広範囲において河川堤防の決壊をもたらした極めて大きな被害を及ぼした台風19号など自然災害の威力の凄まじさを目の当たりにした一年でもありました。被災され、やむなく避難された方々は長期間にわたり日常生活に大きな不便さを強いられたわけですが、その間も一日も早い復旧へ向けて建設業界に従事する人たちがまさしく夜を徹して復旧にあたり、地域での貢献活動に活躍する姿を見て心から敬服するとともにその姿は建設業に携わる者として誇らしいことでした。また、そうした目に見える復旧活動とは別に、地道に実施されてきた社会資本整備が自然災害の発生時にその被害拡大を防ぐために大きな役割を果たした点がSNS等で評価されたことは国民の間に建設業の果たしている役割を少しでも実感してもらう機会にもなったと思います。いまだに復旧工事が継続されている中でこのような事

態を招かないよう継続した国土強靱化への対策の必要性と建設業の果たす役割は極めて重要であるという事を改めて認識しなければいけないと思います。

このような状況の中で2016年3月に卒業し、建設業に就職した新規入職者の3年以内離職率が前年に比べ改善したとの報告がなされています。離職率は低下傾向にあるものの安易な早期離職を避けるために職場定着と早期離職を防ぐ企業の取組みは今後も引き続き必要と思われます。企業で「働き方改革」が進んでいる中、若者の間では収入だけを求めるのではなく仕事と生活の両立を求める声が高まっています。建設業への残業時間上限規制の適用は2024年4月からですが建設業の担い手確保と職場定着には週休2日制や残業時間削減などの「働き方改革」の取組みは一層加速することが求められます。会員各社におかれましては国の安全・安心を守るという建設業の役割を未来にわたって果たしていくためにも担い手確保へ向けた「働き方改革」への一層の努力の継続をお願いいたします。

結びになりますが本年の会員各社の皆さまのご発展とご健勝を心から祈念して年頭のご挨拶とさせていただきます。